

○ 那覇検疫所の概要

沖縄県は陸地面積こそ狭いが、数多くの島嶼部から構成されており、その所在は本島を中心に半径600kmにおよび、全域を那覇検疫所の管轄区域としている。台湾、中国等に隣接し、全県が亜熱帯地域に属していることから、病原体媒介動物に対する港湾衛生調査は通年実施している。輸入食品届出受付窓口は、沖縄県内に2か所（本所と空港支所）に設置しており、空港支所では、那覇空港において輸入・通関される貨物に対して行い、それ以外の沖縄県内で輸入・通関される貨物については、本所が届出の受付を行っている。

（ 1 ） 那覇検疫所（本所）における状況

那覇検疫所（本所）におけるクルーズ客船検疫実績は、平成25（2013）年以降急増しており、令和元（2019）年には那覇港の年間寄港回数（260回）が日本一となった。近年はクルーズ客船の大型化が進み、複数隻同時入港も増え、従来の那覇クルーズターミナルだけでは対応しきれず、コンテナターミナルにも接岸させることが多くなっている。

那覇港は国土交通省による国際クルーズ拠点の指定を受け、新港地区に大型のクルーズ客船にも対応できる専用岸壁と第2クルーズターミナルを整備する計画が進められている。

また、距離的に近隣となる台湾等から来航するヨットに対する臨船検疫、船舶衛生管理（免除）証明書を所持していない遠洋まぐろ漁船の臨船検疫、海上保安庁等による航海中船舶からの急病人搬送、尖閣諸島問題に起因する洋上接触船の対応も発生している。

（ 2 ） 那覇空港支所における状況

平成30（2018）年に年間の着陸回数が日本5位、利用客数6位となった那覇空港は、24時間開港しており、また沖縄県が国内唯一の国際物流拠点産業集積地域（国際物流特区）に認められているため、特にアジア諸国からの物流拠点となるハブ空港として機能は、年を追うごとに重要度が増している。そのため那覇空港における空港機能の強化を図るため、平成26（2014）年1月より第2滑走路の増設工事を開始し、那覇空港旅客ターミナルビルにおいても順次増設工事が実施されている状況である。そして、令和2（2020）年3月26日より第2滑走路の供用が開始されることとなった。また、空港機能の強化のため、令和2（2020）年7月の供用開始に向けた那覇空港旅客ターミナルビルに係る国際線部分の拡張工事が行われており、今後の那覇空港における航空機や利用客の増加及び利便性の向上が見込まれる状況である

（ 3 ） 石垣出張所における状況

沖縄本島から約400km離れている石垣出張所には4名の職員が駐在しており、石垣港での検疫実績は平成27（2015）年以降、クルーズ客船が検疫対象船舶の約4割を占め、令和元（2019）年のクルーズ客船の年間寄港数は148回で全国5位となっている。

非検疫飛行場である新石垣空港へ来航する航空機は平成27（2015）年以降増加しており、台湾や香港からの国際チャーター便が増加している。その他に臨時便として毎年、

旧正月に台湾から航空機が来航する傾向がある。

与那国島の港は、石垣島から127 k mの距離に位置している非検疫港であるが、ヨット等が緊急入港した場合には、与那国島まで出張し検疫を行っている。なお、尖閣諸島周辺での有事に関わった海上保安部ヘリコプターや巡視船等についても検疫を実施している。

(4) 平良出張所における状況

平良出張所は、宮古島市市街地にある平良地方合同庁舎内に事務所を配し、平成31(2019)年4月より4名の職員が駐在している。

平良港におけるクルーズ客船に対する検疫実績は、平成28(2016)年以降急激に増加し、令和元(2019)年におけるクルーズ客船の年間寄港回数は147回で全国6位となっている。クルーズ客船は岸壁に着岸し乗客を上陸させるほか、平良港沖検疫錨地に停泊しテンダーボート(港湾施設に着岸出来ない大型船舶と陸地間の人員、物資等輸送船)を使い、旅客を埠頭までピストン輸送する方法で乗客を上陸させている。

(5) 金武・中城出張所における状況

金武・中城出張所は事務所を設けておらず、本所検疫衛生課が対応している。不定期に貨物船等やクルーズ客船の入港がある。

また、港内にヨットハーバーがあることから、来航するヨットに対する臨船検疫も発生している。

【クルーズ客船とは】

旅客船の中でも宿泊設備と豪華な船内設備を備え、食事の提供を伴う長期間の船旅を楽しむことができる。また、船舶の運航要員やサービス要員に加えて医師、看護師が乗り込んでおり、船内の乗員及び乗客の健康管理を行っている。

なお、那覇検疫所管内の港に入港するクルーズ客船は、中国本土や台湾など近隣から2日程度で来航し、当日中に出港するショートクルーズが9割以上を占める。